

平成 27 年 4 月 2 日

浜田市議会議長 原田 義則 様

議員名 平石 誠



調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため研修等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成 26 年 11 月 11 日～11 月 13 日
2. 視察先及び研修テーマ
 - (1) 徳島県名西郡神山町 NPO 法人グリーンバレー
研修テーマ 「サテライトオフィスの誘致」について
 - (2) 徳島県阿南市 阿南市役所
研修テーマ 「野球のまち推進課」事業について
「婚活応援係」の設置について
 - (3) 徳島県海部郡美波町 伊座利の未来を考える推進協議会
研修テーマ 「小さな漁村集落“伊座利”の取組」について
3. 参加者 小川稔宏 飛野弘二 笹田 卓 平石 誠
江角敏和 西田清久
4. 調査経費 ￥ 32,041 円

5. 調査研究活動の概要

(1) 徳島県名西郡神山町（神山町農村環境改善センター）

<視察に至った経緯>

徳島県神山町は、徳島市から約1時間、人口6000人余で高齢化率46%の過疎の町であるが、数年前には、転入者が転出者を上回っており、神山町に拠点“サテライトオフィス”を設ける企業も増えている。その背景にNPO法人グリーンバレー（大南信也理事長）の存在があり、今回、そのクリエイティブな田舎づくりの中身について視察研修をした。

<視察内容>

「サテライトオフィスの誘致」について

神山プロジェクト ～創造的過疎から考える地域の未来～

NPO法人グリーンバレー理事長 大南信也理事長の講義

- 創造的過疎とは、過疎化の現状を受入れ、外部から若者やクリエイティブな人材を誘致することで人口構成の健全化を図るとともに、多様な働き方を実現することでビジネス（仕事）の場としての価値を高め、農林業だけに依存しないバランスの取れた、持続可能な地域を目指す。

- 過疎地における課題は、雇用がないこと。仕事がないこと。

- ・若者が古里へ帰って来られない。

- ・移住者を呼び込めない。

- ・後継人材が育たない。

- 神山プロジェクト

- ①サテライトオフィス（場所を選ばない働き方が可能な企業の誘致）

羽田空港から徳島空港まで60分、徳島空港から神山町まで60分という地理的要件もあり、ITベンチャー企業など11社が、サテライトオフィス設置・本社移転・新会社設立などで誘致された。

- ②ワークインレジデンス（仕事を持った移住者の誘致）

町の将来にとって、必要と思われる「働き手」「起業家」を逆指名して、商店街の空き家、空き店舗などを活用した起業を促し、町をトータルバランスでデザインする。

- ③神山塾（職業訓練による後継人材の積極的な育成）

厚生労働省所管の事業で、6ヶ月間の求職者支援訓練を行う。

「独身女性」「20代後半～30代前半」「東京周辺出身」「クリエイター系」

（デザイン、編集、カメラワーク）などに絞った人材育成を神山塾で行い、2012年12月に開始し、現在6期77名が終了している。そのうちの約半数が移住し、サテライトオフィスで10名雇用している。また9組の

カップルも誕生している。

<感想>

神山町を訪問して、まず思ったことが「何でここに？」ということだった。しかし、大南信也理事長の講義を聞いたり、街並みを見ると「なるほど」であった。

よくある中山間地のちょっとした街並みが、都会の会社のサテライトオフィスになっていたり、起業家、デザイナー、芸術家など創造性を持った人を集める場所になっていた。都会にない静けさを活かしたまちづくりの中で、都会に負けない通信環境の整備等、人を集めるつぼをしっかりと押さえているところがすばらしかった。

全国各地を視察で訪問させて頂いたが、どこの先進地でも熱い思いを持った“人”が取組の中心となり、その周辺からまちづくりの輪が広がっており、神山町においても大南信也理事長が正にその中心人物であった。浜田市にもそういった人たちが多く存在しているので、神山町の事例も参考にしつつ、浜田市に合ったまちづくりを進めていきたい。



(2) 徳島県阿南市 (阿南市役所・JA アグリあなんスタジアム)

<視察内容>

○「野球のまち推進課」事業について

(阿南市産業部 野球のまち推進監 田上重之氏)

2010年4月に全国初の「野球のまち推進課」を設置し、「野球をするなら阿南へ行こう！」をキャッチフレーズに“野球を資源とした地域戦略”を本格化し、野球と観光・地域文化を結び付けた「野球観光ツアー」、大学や高校野球部の合宿誘致、野球連盟や協会と連携し、西日本各地から参

加する大会開催誘致と運営協力事業を展開している。また阿南に県外チームの集客を図り、地域のにぎわい創出と経済的活性化、県外強豪チームとの交流戦観戦の機会提供など、野球を通じたまちづくりへ市民意識の醸成を図っている。

市民の協力として

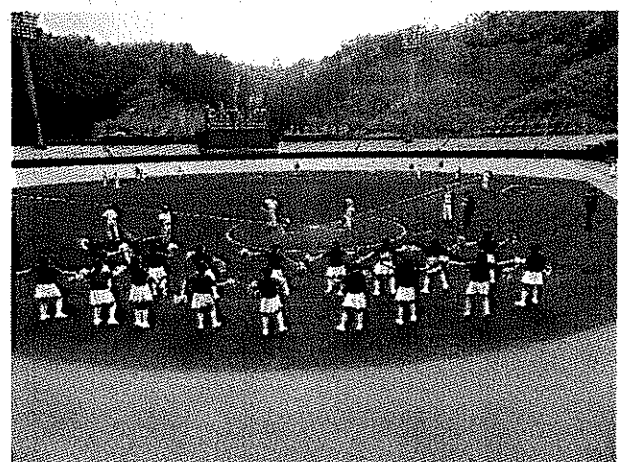
- ① **ABO60**（阿南ベースボールおばちゃん 60 歳以上）60 歳以上のチアリーディングによる応援団が選手を応援して盛り上げる。
- ② おもてなしチーム 野球観光ツアー時に県外チームとおもてなしの精神で対戦し、試合を盛り上げる。
- ③ ゆるキャラ「あなんくん」の着ぐるみを 3 人のグループがボランティアで作成し、市丹に贈った。
- ④ 大型トラックで **PR** 運送用のトラックの後部に「野球をするなら阿南へ行こう」の写真入りポスターを掲載し全国に **PR**。

この事業に対する予算は、平成 26 年度、約 1,300 万円、対して年間宿泊者数は約 3,000 人、経済効果は約 1 億円である。

昼食後は、実際の県外チームとおもてなしチームの対戦を見学した。

<感想>

阿南市の取組は、生涯スポーツとして野球を取り上げ、それを観光資源として利用しているところがすばらしいと感じた。本来であれば、教育委員会の所管であるところを、産業部において外貨獲得と交流人口の増加の目的で見事に観光産業としての位置付けができていた。この取組には行政だけではなく市民との協働が必要不可欠であるが、ここでは歯車がしっかりかみ合っていることを感じた。特に、**ABO60** には、阿南市議会議長も加わり率先して活動に参加されていることには、四国の“おせったい文化”を感じさせて頂いた。



○「婚活応援係」の設置について

(阿南市市民部 ふるさと振興課 婚活応援係 大川康宏係長)

阿南市は、人口約 76,000 人、30,000 世帯で、安心して住める街ランキング全国 19 位、一人当たり市町村民所得が徳島県で 1 位である。

婚活とは、「就職活動」をもじった造語で結婚活動のこと、この「婚活応援係」設置の背景については、市長の公約の一つでもあるが、国税調査による全国や徳島県の未婚率の推移や“今の若者たちは何を思っているのか？”による民間アンケート調査の結果などから、独身の若者たちは意識が比較的自己中心的な傾向にあり、結婚するためには「結婚活動」が必要との認識から平成 24 年 4 月 1 日、ふるさと振興課に「婚活応援係」が新設された。

婚活応援係長としての取組は、

① 市職員による婚活応援隊の結成

平成 24 年 6 月 22 日、プロジェクトチーム「阿南市婚活応援隊」結成
(市職員の中から公募で集まった 20~33 歳の男性 6 人、女性 4 人)

② 婚活支援団体に“縁結び”を呼びかけ組織を強化！

市内で婚活支援に取り組んでいる団体

- ・阿南市農業後継者育成連絡協議会 しあわせネット ANAN
- ・阿南市社会福祉協議会結婚支援連絡協議会
- ・阿南市商工会議所青年部
- ・阿南青年会議所
- ・特定非営利法人出会いふれあい四国最東端
- ・阿南光のまちづくり実行委員会
- ・阿南市婚活応援隊

③ 婚活応援大使の任命

初代、(よしもとお笑いコンビ) 2 代目、ゆるキャラ“あななん”

④ イベントや講座の開催

男女 100 対 100 の大規模イベントや婚活応援大使に任命したよしもとの芸人プロデュースによる婚活パーティーのほか、市の科学センターを利用した星空恋活や野球を観戦しながらの恋活、離婚経験のある男女を対象としたパーティーなど趣向を凝らしたイベントを開催。

婚活事業の問題点

実際にカップルが成立してもプライバシー等の関係から、その後結婚に至ったかどうかまでの把握が難しい。しかし、単にカップル成立や結婚だけが目的でなく、家にこもりがちな若者たちの交流を深め、自分の

住んでいる地域の良さを自覚するきっかけとなることも大きなねらいの一つ。

<感想>

晩婚化が進む中、若者たちの意識をどう変えて行くかが、今後の大きな課題であろうと感じた。草食系と言われる現代の若者に対して、行政なり NPO 法人等が幅広い連携で、男女間のコミュニケーションを醸成していく取組が重要と感じた。

(3) 徳島県海部郡美波町（伊座利漁業協同組合）草野組合長

伊座利校校長 伊座利の未来を考える推進協議会副会長

<視察内容>

「小さな漁村集落“伊座利”の取組」について

小さな漁村集落“伊座利”は、徳島県の南部、太平洋に面する美波町の最東端に位置し、入り組んだ海岸線と三方を山に囲まれ人口百人余り、漁業が唯一の産業で地域社会と経済を支えている。学校は、同じ校舎で学ぶ辺地 2 級の小中併設校、通称“伊座利校”がある。ところが過疎、少子高齢化で児童生徒数が減少し、統廃合は時間の問題となったが、“学校が無くなれば地域はますます寂れる！”ことから“何とか出来んか”と地域で山村留学制度の提案などを行政におこなった。しかし、時が過ぎても行政からの反応が鈍い状態が続き、“このままでは伊座利校が無くなる！”「なんとかせな！」と行政支援を諦め地域全体で立ち上がった。

- ・ 一日漁村体験イベント「おいでよ海の学校へ」開催（H11.11.17）
（学校の灯火を消すな！を合言葉に伊座利校へ児童生徒の転校を呼びかける活動）県内外の親子（定数 30 名）が対象で、企画から運営まですべて住民の手づくり、これが親子連れで受け入れる漁村留学の始まりとなる。
- ・ 動いたことで鮮明に見えてきた課題への対応として赤ちゃんからお年寄りまで全住民で構成する「伊座利の未来を考える推進協議会」（H12. 4）を結成。 * キーワード 交流
* キャッチコピー なにもないけど、なにかある！
- ・ 活動にあたっての視点とポイントを明確にし、地域にある資源（ひと・もの）を活かす地域内情報発信活動と攻めの姿勢として積極的に都市部へ出向き情報を発信する。

- ・ 移住者の受け入れ方は、来てください、住んでくださいといった受け身の受け入れ方はせず、地域の一員となれる人（家族）を『面接』で決めている。“全て自己責任で生活できる人（家族）”が対象。
- ・ 伊座利流「漁村留学制度」
 転校の条件：子どもだけでなく親も一緒に転入
 転校の儀式：三者面談（地域住民代表、学校代表、転校希望家族）
- ・ 全国各地から転校してきた子供たちは、1～2年の短期間から定住希望まで、これまでに100人を超える。
- ・ 伊座利流「漁師希望者の受け入れ方」
 伊座利で漁師になるための条件は、一人前の漁師になれるまでに最低でも3～5年かかることの自覚とその間は収入が無い覚悟。その自覚と覚悟を持った人を面接で受け入れる。
 現在、移住定住している漁師は5名（内海女さん1名）
- ・ 海女さんたちや漁師のおばちゃんたちで運営する「イザリ Café」やお年寄りが主役のたまり場「田舎 de きゃばくら」など充実施設がある。

<感想>

急峻な山道を越えたどり着いた先が、四国の南東の端に位置する伊座利地区であった。失礼な言い方ではあるが、「どうしてこんな所に人が集まるのか」が第一印象だった。しかし、伊座利校の校長先生の話と、子供たちの姿、地区の人の姿で「なるほど！」に変わった。伊座利でのあらゆることを地区全体で取組み、総勢100名ほど住民が家族のように活動している姿を見て、コミュニティ活動の参考になると感じた。

「まちづくりは人！」この言葉をキーワードに、今後の浜田市のまちづくりに活かしていきたい。

